

企業強みの研究

橋梁や道路の安全性を支える「ゴム支承」。

国内工事に使われる3割近くを製作する。

株式会社佐野テック



<http://www.sano-tec.jp/>

橋のたわみを吸収して 橋梁の破損を防ぐ「防震支承」

鈴鹿山脈の東山麓に広がる三重県孤野町。御在所岳や湯の山温泉で知られるこの穏やかな地域で、株式会社佐野テックは橋梁や高速道路、一般道路の安全性や耐久性の維持・向上に欠かせない金属加工部品を製作している。

代表的な製品は「支承」と呼ばれる橋梁部品だ。橋の主桁や橋台は温度変化や風、地震の影響で伸縮や変形が起きる。そのたわみを吸収するのが支承の役割。主桁や橋台と橋脚の間に取り付け、橋梁の破損を防ぐ。

「支承を設けずに、主桁と橋台・橋脚を一体化した構造の橋をラーメン橋と呼ぶが、1995年の阪神淡路大震災で多くのラーメン橋が倒壊し、ゴムパッドを使用した橋が被害を免れた。これを機に、



多くの防震支承が使われたラックフェン国際港アクセス道路(ベトナム)

橋梁の耐震設計が大幅に見直され、それまでは鋳造品による固定型が多かった支承も、積層ゴムを用いて高い防震性を実現したゴム支承(防震支承)が主役になっていく。この変化は、当社が支承を手掛ける大きなきっかけになった。佐野明郎社長はそう振り返る。

1932年に創業し、四日市富田港で使われる船舶用器具を作っていた同社が道路・橋梁部品を手掛けるようになったのは67年頃。独自のゴムファイバー製造技術を持ち、社会インフラ整備を手掛ける大手企業T社と出会い、橋梁ジョイント部品の製作を頼まれたことから始まる。伸縮継手と呼ばれるこの部品は、大きな橋などの道路面を横切るギザギザした黒い帯状のものだ。

阪神・淡路大震災までの佐野テックは、大きな加工設備を持たずに東海4県で使われる伸縮継手を手作業で作っていた。「震災後に起こったゴム支承に対する高いニーズは、当社にとって劇的な上昇気流になった。支承を扱っていな

鉄の加工技術をフル稼働して 橋梁の部品を一貫加工する

強みはもう一つある。「板金や溶接、マシニングセンターによる機械加工など、あらゆる鉄の加工技術を総動員しないと支承部品は製作できない。ゴム支承に関わる鉄工所は国内に多数あるが、一貫加工できるのはおそらく当社だけだろう。この業界では、加工種類別に分散発注するのが一般的。工程の全てを一貫して加工できるのは当社の強みだ」。

G7伊勢志摩サミットで脚光を浴びた賢島大橋を筆頭に、佐野テックが製作した支承は、全国の橋や道路を文字通り支え続けている。滋賀県では、日野川橋や栗東水口道路に採用された。今後、国内では橋梁や道路の新設には多くを望めないものの、安定した付け替え需要が見込まれる。国外ではベトナムなど新興国の社会インフラ需要が依然として

意外な建築事業も展開 木造住宅もオフィスも建てる

佐野社長は長年建築業界で働いてきた経歴の持ち主。佐野テックでも橋梁事業と並行させながら、戸建て住宅やオフィス・工場の建設を数多く手掛けてきた。鉄骨建築はもちろん、木造住宅も扱う。「現在、建築事業は売り上げの20%。橋梁部品を作る会社がなぜ住宅を、との違和感を拭い去ろうと、口コミでの信頼を広げながら実績を積み重ねている」。

佐野社長は「佐野の家」を周辺地域に広めていきたいと意気込む。

佐野テックの従業員は来訪客への接遇姿勢が良いと評価が高く、三重県が



設計・施工を手掛ける「佐野の家」

推進する「おもてなし経営企業」にも選ばれた。佐野社長によれば、異業種交流を目的にした「カイゼン見学会」に取り組んできた成果だそう。見学会は異業種企業が互いに会社を訪問し、業務改善を現場から学ぶもの。これを通じて、自社と異なる考え方を理解し、来訪客への対応の仕方を身につけてきた。

この「おもてなしの力」で地域から愛される道を歩み続け、100年企業を目指すことが佐野社長の夢だ。



ラックフェン国際港道路・橋梁(ベトナム)に使用された防震支承

Profile

株式会社佐野テック

- 本社/三重県三重郡孤野町大字千草5051-9
- 設立/1983年
- 資本金/3,000万円
- 従業員数/66名
- 事業内容/一般道路・高速道路・橋梁に関する部品等の製作・設置・施工、鉄骨建築・木造建築の設計・施工
- スカイライントチューブ三重 特約店



代表取締役社長
佐野 明郎氏

Voice

今夏に落成した新社屋には、滋賀県の企業が考案した太陽光照明「スカイライントチューブ」を30数基設置。高い省エネ効果を実現しました。住まいと事業所の快適性と効率性を高めるなら電力を使わない太陽光照明がお薦めです。